

いま、全国で方言ブームが起こっているそうですね。誰でも心が疲れたとき、心がさびしいとき、ふるさとのことを思い出します。ふるさとの言葉は、そんな都会の孤独な人たちをやさしくあたたかく包み込んで、はげましてくれる力があるのです。

ところが一方、方言がどんどん消えていくのが日本の現実だそうです。本土のことはよく知りませんが、この沖縄でも島ことばがどんどん消えていくのが、沖縄芝居の舞台に立っているとしひしと感じられるのです。

いま沖縄は「芸能の宝庫」といわれて注目され、沖縄経済にも島おこし（地域振興）にも大きく貢献しているといわれますが、もしもウチナーグチ（島ことば）がほろびてしまったら、沖縄の音楽も舞踊も祭りも、沖縄の文化や社会の土台までがたがたになってしまうのではないのでしょうか。方言にはそれほど大きな力があると思うのです。私の小さいころは、学校では方言禁止で、なんども教室で立たさ

れたおぼえがありますが、いまでは方言の大事さが見直されて、学校行事にもウチナーグチが入れられているようです。また、このごろではあちこちで方言教室が開かれるようになりました。じつは私もこの二月から、那覇の桜坂で開かれた方言教室にまねかれて、夫の平良進とペアで方言講座のワークシヨップを受け持つようになってのです。週一回のワークシヨップを十回続ける講座ですが、驚いたことに、二十人あまりの受講者の八割はヤマトウンチュー（本土出身者）なんですね。方言ブームのせいなのか、沖縄ブームのせいなのかわかりませんが、とにかく難しいといわれている沖縄の方言に本土の人たちが熱心に取り組んでいる姿は驚きでもあり、嬉しいことでした。

ウチナーグチが難しいのは、島々村々によって言葉がずいぶん違うし、共通語というのがあるのかないのかはつきりしないのもやっかいです。しいて言えば、芝居言葉が共通語の代用をしているのだと思い

島言葉は島の宝

沖縄芝居役者 平良 とみ(たいら とみ)



ます。戦前も戦後も、沖縄芝居の一座は沖縄全域を巡回公演しますから、沖縄芝居で使われる言葉はどの地方でも通用するわけです。

私たちのワークシヨップでも、芝居言葉を使ってウチナーグチの基本を手ほどきしています。いつ、どこで、誰に向かってどんな言葉づかいをするかは、なかなか理屈では説明しにくいのですが、これを芝居で見れば一目でわかるわけです。ですから、沖縄方言講座の受講者たちにも、どんどん沖縄芝居をみて生きた沖縄言葉を覚えなさい、とすすめているのですが、その肝心の沖縄芝居が、いま後継者不

足で先行きが心配されているのが実情です。

なんとか沖縄芝居を復興させ、次の世代に生きた島ことばを伝えていくのが私たち沖縄芝居役者の大きな務めだと思います。その一助にでもなればと、私たちの劇団綾船（平良進座長）では幼年部というのを設けて小学生ぐらいの子ども達に沖縄芝居を本格的に教えています。昨年十月の県立郷土劇場での公演では劇団綾船とならんで、劇団綾船幼年部として「孝行三良小」の演目をかかげて、子どもたちだけで演じきりました。新聞の劇評でも「慣れないウチナーグチで懸命に演じる子どもたちに盛んな拍手が送られた」と書かれました。沖縄方言は難しいといっても、子どものころなら見たり聞いたりしているうちに自然に身に付いてくるものです。学校の芸術鑑賞の時間などでもぜひ沖縄芝居や組踊などにふれる機会をふやして、沖縄の宝である島ことばを次の世代に受け継いでほしいものです。